木芽乃説

841
46

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

木芽考乃説

841
46

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

木の芽もちかう
いまよりはうせわ
きことゝおもふ江戸は
里なる當國のわ
しふをとゝのまつる
みとゝいふことを
てこいわゝとふこゝ
まといふうめゝ
のふゝ

根岸鎮衛氏委託本
根岸信衛氏寄贈
坂本文庫

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

類聚國史巻卅一云
弘仁六年夏四月癸亥
幸近江國滋賀韓崎便
過崇福寺大僧都永忠
護命法師等亭衆僧奉
迎於門外皇帝降輿外
堂禮佛更過梵釋寺傳
燈賦詩皇太弟及群臣
奉和者衆大僧都永忠
手自煎茶奉御施御被

木芽説

茶ということのいと古代よりはあ
ることなれど世こぞりて用ゐるは
近江國よりぞ始まりたるなり類聚國史な
どにも載せたるものなれど弘仁六年のむかし
の夏近江國へ幸ありしとき崇福寺にて
法賀僧等に茶など煎じて奉らしめ
みづからもたまはりたまへる時梵釋寺の

文政十一年秋山塚國宝治書

上林盛一

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

類聚國史卷卅三云
弘仁六年六月壬寅令
畿内竝近江丹波播磨
等國殖茶每年獻之

永忠大德於多[illegible]
まてにみのどさ[illegible]
て野邊ひてかづけ[illegible]
てそのふもとに[illegible]
多くく近江丹波播磨[illegible]
ぬかせて國ごと[illegible]
そ〳〵ぐれ貢[illegible]
し〳〵[illegible]
用ることさ[illegible]
世の人まで[illegible]

元亨釋書卷十六云釋
永忠京兆人姓秋篠氏
寶龜之初入唐留學延
曆之季隨使帰
日本記畧云弘仁七年
夏四月庚子是日大僧
都永忠卒年七十四

てづめとそ[illegible]
かの僧都そよ[illegible]
なひふかく園[illegible]
ふあはきの妻秋[illegible]
つくわのみかぐ[illegible]
かばそはよや此[illegible]
ねはをいとな[illegible]
やかまおひ[illegible]
くこそもうら[illegible]
そのくはく人の[illegible]

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

凌雲集序云自延暦元
年終于弘仁五年作者
廿三人詩總九十首合
為一巻名曰凌雲新集
秋日皇太弟池亭御製
蕭然幽興處院裏滿茶
煙夏日左大将軍藤原
冬嗣閑居院御製吟詩
不厭攄香茗乗興偏宜
聴雅弾　同日陪幸應
製滋野貞主酌茗藥
室徑行入横琴玳席
倚岩后之詠
の詩八此集採載
弘仁文華のみにても
好國史よりハ先たち
出る

文華秀麗上巻夏日左
大将軍藤原朝臣閑院
納涼應製令製淳和
天皇

提琴搏茶老梧間
入凌雲集之句
同時のものなり

中巻云題光上人山
院錦峯公相談酌緑
茗煙火暮雲間巻澄
公奉獻詩御製羽客
親講席山精供茶埜
日吉社神道祕密記云
茶木數多有之茶實從
大唐傳教大師求持有
御帰朝植此處其後山
城國宇治鄉栂尾哉ニ
植弘給かくんゆゑとも
此書いと後号のものある
う傳教大師茶栽この
国よ植りめて宇治
栂尾へも植弘めるれる
あるうつのの御世
草ーきあれまるなれい

ーていまぐ世る此
ろれんにをおや
張あるいそかこの
なくきーめすやう
ふ植いふ母もはば
傳そのを志ーてお
ーいむもおば國史
めのを思ふそよ
なあけの世かど

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

西宮記臨時五内裏所
所條云茶園在主殿寮
東拾芥抄宮城部說同
大内裏攷證卷廿九云
茶園在宮城艮隅占地
方卅五丈百寮訓要云
典藥寮ころくの茶
を収めらるゝ所なり
寮よハ藥園あり茶園
ハ勿論杜園あるとこゝ
もまた藥園ハ此寮よ
あるさるよなるべし
但典藥寮の管るゝ所
ゆへあるべきなり

遍照裳撰性霊集巻三
中壽感興詩序云
曲根為褥松栢為膳茶
湯一埦逍遥也
巻四弘仁五年潤七月
八日獻梵字並雜文表
窟觀餘暇時學印度之
文茶湯坐来乍閱振旦
之書
巻十天長六年九月賀
元興大僧正大徳八十
詩序云是故取郷飲上
齒之禮仰大士供尊之
義聊與二三子設茶湯
之淡會期醍醐之淳集
同為泰範呑敵山澄和
尚啓云煎蒙貺十茶喜
荷無他
發揮拾遺篇書牘云思
渇之次忽恵珎茗香味

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

凌雲集御製吟詩不獻
搗香茗文華秀麗令製
提琴禱茶老梧間

和名類聚抄卷十五木
器類茶研章孝標集有

黄楊木茶碾子詩茶碾
子俗謂之茶研研音加
彦反

経國集卷十四云和出
雲巨大守茶歌惟氏
山中茗早春枝萌茅採
擷為茶時山傍老愛為
寶獨對金鑪炙令燥空
林下清流水沙中漉銀
鎗子獸炭須臾氣盛
盆浮沸浪花起鞏縣埳
閩家盤吳鹽和味二更
美物性由来是幽潔深
巖石髓不足比煎罷餘
香處二薰飲之無事卧
白雲應知仙氣日氛氳
唐人或八煮茶煮或以
薑椒入茶煮之

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

東坡志林ニ此事ヲ記シテ醉能ノ詩ヲ臨摸添
常戒並宜者更涛ト
ヲ待ヲ引ヲ出ヲ彼
ヲ
田氏家集巻下ニ滋十
三摘茶詩云不勞外出
好居家大抵閑人尽愛
茶見我銚中魚失眼聞
君園裏茗為芽詩行許
摘何妨決使及盈筐可
得誇庭樹近来春欲暮
莫教空腹猶看花

真俗交談記云延喜二
年醍醐天皇仁和寺朝
覲行幸御時法皇御對
面後茶二盞有御勸和

琴一張為御引出物令
進之給
花多餘情ニ茶云字多
の法ヲ作出公家ヲ正
月二日ノ勅覲行幸ノ
ため延喜乃ことく仁和
一ノ事ヲ一ノ時ハ沓靴
を徴ヲ
ヲ
法皇ヲ
セ
乃時の儀ノ
ノ
ヲ
ヲ
ヲ

新儀式上巻　天皇奉
賀上皇御算事云供御
膳臺盤二脚次供御酒
延喜十六年法皇供御
茶也又次召加親王大
臣參上候簀子敷延喜
十六年供御膳次召大
臣并僧正聖寶遼世親
王令候賜膳賜茶次召
上皇之親王等
菅家文草巻四八月十
五日夜思舊有感詩云

茗葉香湯免飲酒蓮華
妙法換吟詩

書懷詩云東方明未
瞶悶飲一杯茶後集
雨夜詩云起飲茶一
埦飲了未消磨

都氏文集銚子廻文銘
多煮茶茗飲来如何和
調體内散悶除痾本朝
文粹巻十四載之

延喜式巻廿三民部式
云年料雜器尾張國瓷
器大椀五合徑各九寸
五分中椀五合徑各七
寸茶小椀徑各六寸椀
廿口長門國瓷器大椀
五合徑同上中椀十口
徑同上小椀十五口徑
同上茶椀廿口徑同上
右両國所進年料雜器

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

並依前件其用度皆用
正税
又諸按ニ尾張國ノ献
物ニ茶小椀ニ○ト○ロ
幾口ト云ク数ヲ云ヒ
ヨセヌ法ナリ長ツ國
ノ小椀ヨセテ又椀廿
ニアルハ七ツノ茶椀ノ
数ト云ヒ又尾張ノ献
物モ小椀幾口茶椀廿
口ト云ヒ○ヲ茶ト云
ヒテ小椀ノ○ヲ今
サテカヽル幾口ト云字
ヲ脱セルナラン〳〵
ヲ○ス小茶椀ト云
ヒ一ケヲ茶小椀トハ
イヘドモカヽル些ノ
椀数モヨセハモラス
國ノ献物トヒトシ
ク

これハ此頃ハ文字の誤
まり〳〵なるべし
○○○

皐人式云年料竹器茶
籠廿枚方二尺新篦竹
各六株
本朝文粋巻十二慶保
胤晩秋過参州薬王寺
有感参河州碧海郡有
一道場曰薬王寺有茶
園有薬圃

いつをこれハいまだ
しらねどそのころ
のえざるまゝなる
やをもうゑおかれ
しのへいふむわびや
あるじのみ
いまだこゝろをいたさゞ
りけんさだめて
のさだめぞをの中みを
ゝれず

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

権記長徳元年十月十
日條云下給出納為親
造茶所請者今年料造
進御茶料物文

北山抄巻二御佛名事
裏書云天暦九年十二
月廿二日左大臣參入
入道親王依召參候結
願後撤御前臺施菅圓
座入道親王侍有仰奏
管絃先吹雙調次親王
依仰彈和琴數曲後賜

法親王禄紅染細長一
襲御衣櫻色綾一襲茶
并茶具二裹自五葉枝

西宮記九月季御讀經
條云召典藥厚朴為引
茶料臨時御讀經條云
上卿依仰於陳定僧名
令勘日時廿日卅日隨
時議内蔵寮進折物請
奏蔵人奏下辨史催行
夏別茶仰内蔵寮四位
行水五位六位引茶甘
葛煎

江家次第季御讀經條
裏書云天喜四年三个
日毎夕座侍臣施煎茶
衆僧相加甘葛煎亦厚
朴生薑等隨要施之榮
宸殿所雑色等參上施

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

件茶於大極殿修時亦
同但茶用器等所例也
見蔵人式
河海抄於院書事法
と云書杜内裏にて大殿
茶湯を濫觴とも
見引茶とて侍と茶を
加てなり中宮寿宝と
称する事
海人藻芥茶申立茶者
自上古我朝ニテリ挽茶
茶會ト云テ於内裏被行
之事儀式弘仁年上侍従
唐ノ時宝物茶ノ種ヲ被
渡栂尾高山人號ヲサ
ヒ寺ノ茶ト云栂尾ヲ
那ト云字ヲ誤ヨリ事ナリ
續本朝文粋巻十一宗
孝言茶讃云蜀山所産

自有昌明煙液塵細雲
漿泳生奠来虎眼慰洗
人情散悶之計乃功不
軽
玉海安元二年三月

ふるの作りさ
わるしたる
法皇の
彩りし
て法
ふの
なるて
ふるあ
ぶ

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

おもきものを下文を参するめ―

東鑑巻廿二云建保二年二月廿四日将軍家聊御病悩諸人奔走但無殊御事是君去夜御酒酔餘氣歟爰葉上僧正侯御加持之處聞此事稱良藥自本寺召進茶一盞而相副一巻書令獻之耶讐茶徳之書也将軍家及御感悦云

喫茶養生記序云茶也養生之仙藥也延齢之妙術也山谷生之其地神霊也人倫採之其人長命也天竺唐土同貴重之我朝日本曽嘗愛矣上巻云採茶時節採

茶様調茶様數我國人不知採茶法故不用之還譏曰非藥是則不知茶徳之所致也榮西在唐之昔見貴重茶如眼有種二語不能具注給忠臣施高僧古今義同下巻云喫茶法極熱湯以服方寸匕二三匕多少随意但湯少好其又随意

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

栂尾明慧上人傳記巻
下云建仁寺長老ヨリ茶
ヲ進セラレケルヲ醫師ニ是
ヲ問給フニ茶遣困消食
氣快カラシムル徳アリ然ト
モ本朝ニ普カラサル由申ケ
レハ其實ヲ尋テ西土ニ本植
初ラレケリ誠ニ眠ヲサマシ氣

ヲハラス徳アレハ衆僧ニモ服
セシメラレキ或人語傳ヘ建
仁寺僧正御房大唐國ヨ
リ持渡給ケル茶子ヲ被
進ケルヲ植ソタテラレケル
云云サノ傳記ハ上人ノ
ヲ喜海ナツノカミルヨリ

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

年中行事歌合廿五番
左上野駒引右季御後
紅女房二條判詞左勝
御後紅葉大納言
春秋をそれぞれにつくして
後をとれ侍るわびき葉乃
うへ葉をのみなりて
さまに葉はむつよるれ
おも光のかてまし
みそれハ大内山もくも茶苑
みと侍る物う中に
風乃ゆのとく人とあらん茶乃
柱う葉と侍ようなをや
はひうるるて侍るに
おそ

つまむ乃めれ
きこものをいでそ
光園院乃おとぶの
利のこ葉よ葉いは
もてなし
をのと人葉乃
はひづこ
おそて梅乃と人
むいぶきこ

たぐたかのと人乃うを毎
いとよう
つまたこ
世よいくくめ
人のうへ
おをうる
をまきいさは
そ世もさまぐ
免をおろくいの
で葉と侍ふとび侍へそあ

伯大蟲の養湯記乃説
与を挙たり

勸修寺慈尊院榮海僧
正撰マレシ真言傳第七ニ
載タル高弁上人傳ニ生
年十六歳ニメ高雄文覺
上人ノ弟子行慈上人ニ
随テ出家シ東大寺ニシ
テ具足戒ヲ受建仁元
年紀伊國糸野菴室ニ
テ上覺上人ニツキテ灌頂
ヲ受ト見エタリ本文ニ記

セル六上人ノ弟子喜海沙門
カ述タル明恵傳記元亨釋
書等ニヨレルナリ

大平記巻七千劔破城
軍事云大将ノ下知ニ随テ
軍勢ミナ軍ヲヤメテハ慰
ムカタヤ無リケン或ハ碁雙
六ヲ打テ日ヲ過シ或ハ百
服茶褒貶ノ歌合ナトヲ

誌テ夜ヲ明ス巻十九光
嚴院殿重祚事云物ニモ
覺エヌ田舎ノ者トモ茶ノ
會酒宴ノ砌ニテ
塵添壒嚢抄巻四云十
服茶ノ法茶三種ヲ以テ
各四服ヲ點テ各一服ヲ
取テ試トス仍残ル所三
三九服ナリ不試茶一種
アルカ故ニ是ヲ客ト云也
是ヲ三種試ト云ナリ近
来ハ茶三種ヲ以テ各三
服ヲ點テ客ヲ加フ是ヲ
點攻トモ云兎試茶トモ云
也最初ニ聞ヲ一ト定テ
札ヲ不打故ニ一種試トモ
云ナリ是ヲ田茶ト云田ハ
頴田カ田也聞一知十故ニ
尓云也又貢茶ト云ハ子
貢カ貢也子貢ハ聞一以

テ知二ト云リ以四種成十
服茶ナレハ一種ヲ以三服ヲ
點ムヲ聞一知二即知三
也同シ茶ナルカ故ニ四ケ
度ニ知所ハ劣ナレトモ十
ヲ知義ハ同シキカ故ナリ

喫茶往来 云恵法
尓作 云昨
日茶會堂兄院ニ參
會ニ予招根不少法生
ニ謝座多端法房隆伊
事柿彼會所為龍肉客
殿照珠筥茶大庭鋪玉
砂軒壺幕宮蜜帷妙士
即逮會衆既ニ集ニ後初
水纖酒三献次雲麺茶
一返然後ニ山海珍物
熟飯ニ林園美菓甘味
ヲ後起坐退席ニ寄
寿屋侍栈敷ニ於ニ階排

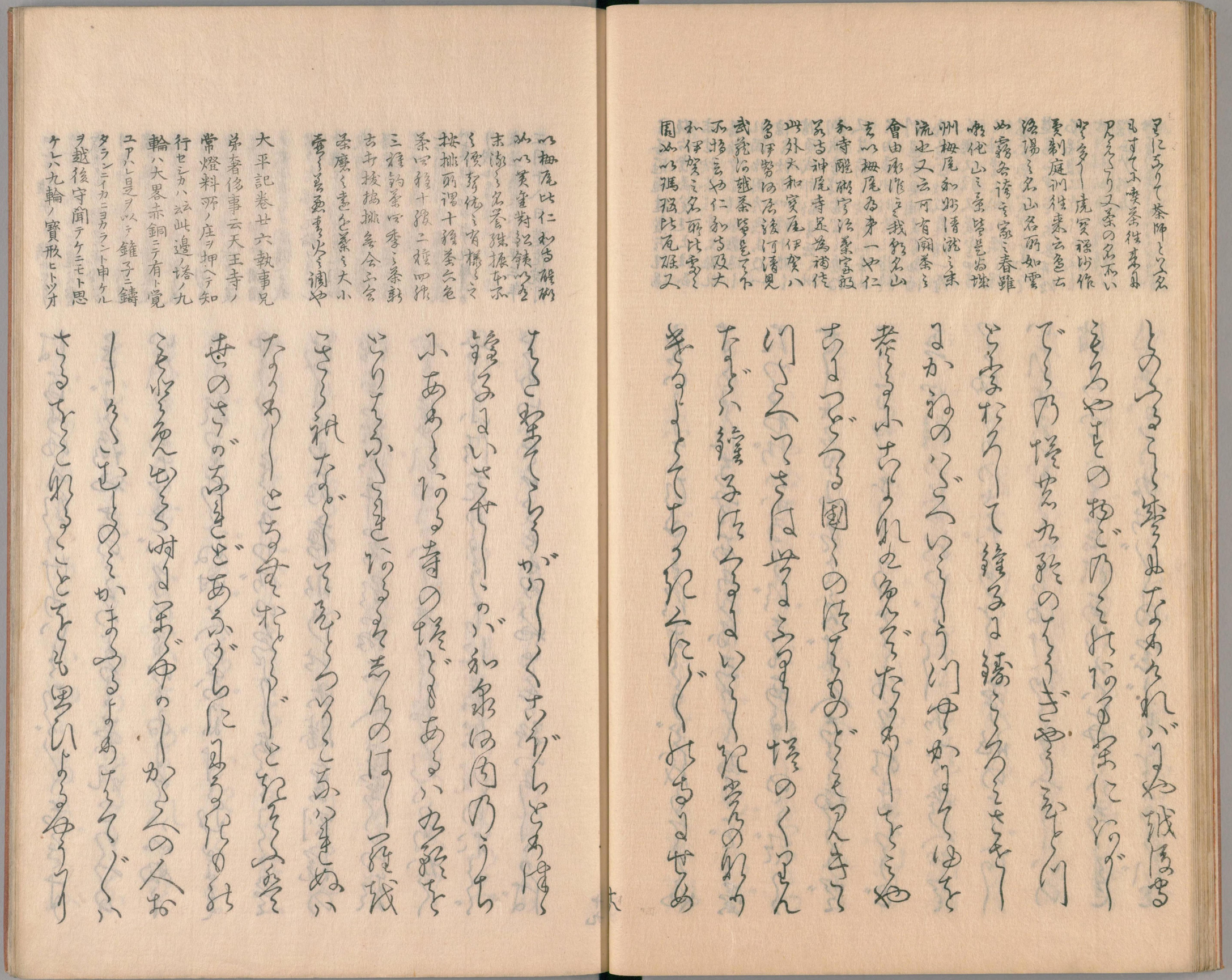
国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

眺望於四方是則幽茶
之亭對月之独やた思
茶之彩色粉地雲山従
仁之粧巌と太牧法之
墨跡観音普陀示現之
姿尊と雪賢文殊也昭
陰寒山於湯之面餅卓
點雪濃垂於細之花瓶
机補錦繍之綸石之香
炉火箸客位之於床縄
弱皮之位之竹倚陰金
砂香臺益衡朱衛紅之
香箱茶壷各梅尾高雄
之茶袋西廂前壹一對
之銚柵布鋏持之松葉
小碗下建一盤之屏風
布擁之之點物中立鐘
子之陰湯巴並位抱布
霞中會衆列坐之度亭
主之息男歌茶菓梅桃

之善冠通建盞方提湯
瓶右曳茶筅注上位亟
末座歌茶位勇不雑乱
茶臨堂雲清敬數返之
礼酒酌用吹點未及一
宿之飲亦四種十服之
勝負或都鄙善悪之批
判非當儀當堂之興物
又生前之活計仍事如
之日表御作茶礼將終
則延茶具納美肴勧酒
及度末歌或舞悟一座
之興又弦又笈四方
之袖当上桃紅擬之帽
筥布嚢中茶筌之茶
遊高之神君為幽併記
而湯渡江輝彩之林繁
七日掃部助氏清達上
孫西少郎夜
此古茶之書

多いしてひるまでまうでまいりぬ
すこしたゆまばいかにあやしう
たつるわざいかにそこそみそ
せうさうまでもうでまいりぬ
うすのみをしてかへりぬ
をはつせのさだめてまうでまいりぬ
いひしろくかちぬけのうそふかの
清見ふてをうむやいきまき
もまかくのごとくのごとくしと

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用



ロシテ鍾子ニノ鑄サセタリ
ケルケニモ人ノ云ニ違ハス膚
寒ナクシテ磨クニ光冷ニタ
リ芳甘ヲ酌テタヅル時建
渓ノ風味コマヤカナリ東坡
先生カ人間第一ノ水ト美
タリシモ此中ヨリヤ出タリ
ケン上ノ好ム所ニ下カナラ
ズ
從ノ習ナレハ相集ル諸國
ノ武士共コヽヲ間傳ヘテ我
劣ラシト塔ノ九輪ヲオロシ
テ鍾子ヲ鑄サセケル間和
泉河内ノ間數百箇所ノ
塔婆トモ一基モ更ニ直
ナルハナク或ハ九輪ヲオヨ
レテ外形バカリ有モアリ或
ハ真柱ヲ切ラレテ九層ガ
リ殘ルモアリ

東草集巻六 応平三年
正月十八日 蓮花院月

並和歌序云巻諷詠之
遊展盃酌之席酒飲漸
止茶礼重催勝遊之端
何事不足喫茶往来云
日景漸傾茶礼将終
海人藻屑中云云
人ノおこテ茶持ツカヒ
不知ハ学ヒやハ大事何
習ふ事やハ速ニ茶
一服入テ汲ヲ半計入テ
茶筅ニテタヽル時タヽキ
タト湯ノ音ノ少ユル様ニ
タヽルナリト何物井ノ水
弁上人被申キサレハ
彼同宿トモノ茶タヽ片
トヲ少ハむセ給や

要制庭訓往来云後
造会之秘蔵酒肴上
小島天物芳一献外畑宮

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

沙門蘭叔述酒茶論云
西齋詩話云壽上人田
自日本以其國所産梅
尾山茶見恵賦詩謝之
其畧云幸得梅山信初
嘗日本茶本朝梅尾山
為第一宇治次之梅與
梅相似故通而用近代
好茶者以宇治為第一
梅尾山次之有宇治茶
之別稱曰無上曰別義
曰極無

信門不見梅尾名入
吉壷法印進之後一條
禅閤の仰ありて尺素性
来云勅使芸閣筆写之
茗茶院蘭復南都之本
所望之趙山城守宇
治者當代名茶之随
稱梅尾者此間跡無歟
禅閤名不審之後
又召被思合点者如
此被書指史杉二首歟
其晩之左右何被宣旨
出之茶後欲進御壷
二ヶ進之歟自然澁
之走掲二茶一茶可被
加之後又西行庵入ホ
被合五ヶ後溯加井遠
外畑小島荒河ホ之名
苑ホ茶揚地掃合
之不玉一貴茶可被收
之

名たる園なつかしやそのかみ
茶といひてそのありかをふみ出る我ぞ
姫の茶とよびをやしなひ
見ふるきことものどもはたくいでつゝ
てはのちおぼろいかりそめしかけも
梅尾八ま法のつゝかくこゝろ
中おとろへそめてそ珠光ぐさ
おしへつゝ地きてをそのまゝ紅蕊と
いふものはつゝ我紅蕊よりをしめ
宗易は侘つゝ法ひとすぢの
ふみ引ゝ人のひろすゝめでたふとぬるを
み引ゝ猶ゝまゝ一たのもあやうみのすさびさ
の茶は世にあぶまつゝよるとうり
ふみ引ゝ人のひろすゝめでたふとぬるを
ま引ゝ猶ゝまゝ一たのもあやうみのすさびさ
の茶は世にあぶまつゝよるとうり
たのもしき引ゝ法ひとすぢの大珠はあるの一
ま引ゝ猶ゝまゝ一たのもあやうみのすさびさ
の茶は世にあぶまつゝよるとうり
たのもしき引ゝ法ひとすぢの大珠はあるの一
家法の茶をとゝ更ゝ又茶所と称さを

後頼の散木葉を
おもしろおかしのものの
ふるまひをめさまし
うつりゆく
散よりおそき
いつるをめさまし
と名つけられし
雨の茶経し茶は性冷
而味苦よく瞋恚を
おさへ採家生採の
かうをめよ
ゆかしき
仲人本と
よりくさとこそ
たてまつる
ふるい文字の

しるしなれ
なの雪あふれ
はいろいろ
——山も
なの雪あふれ
なでもう
ふるまひ
雨の茶経し茶は性冷
而味苦よく瞋恚を
おさへ採家生採の
かうをめよ
ゆかしき
仲人本と
よりくさとこそ
たてまつる
ふるい文字の

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

やびてあきさるのはひるまをねむりよるもよもすがらかやのうちにかをきゝてそれにはやくこゝろをとめてものゝねをきゝわけんとするにすべてなにのおとゝしもなくしづまりかへりてあるにしもあらずかぜのおとにもあらずしぐれのおとにもあらずたゞかやのかをきゝてむかしのことをおもひいでゝはかなくもまたあはれにもたえがたくこゝろぼそくなりてなみだのこぼるゝをおさへがたしこれをかやのかをきゝてなみだをながすといふ

唐萬首絶句に銭起與趙莒茶驢と云詩あり其詩に竹下忘言對紫

茶全體和名抄云茶
塵小說云茶無新老一種
新焙名細白
陳焙名麤黒
陸羽茶經云茶
飲宜精行儉德之人
若熱渴凝悶腦疼
目澁四肢煩
百節不通
聊四五啜與醍醐
甘露抗衡也
茶性最冷陰乾
煮飲宜熱飲
冷則發病
茶生山野者
上作者次之
茶紫者上綠者次
筍者生煎
葉卷者熟煮
散者蒸搗
茶性最宜精行儉德之人
若熱渴凝悶腦疼
目澁四肢煩
百節不通
聊四五啜與醍醐
甘露抗衡也

むかしの人のいへるごとくこの茶のこゝろをしれるものはまことにすくなくしてたゞ茶のいろかのみをのみしるものおほきにこゝろをとゞめてこれをみるにいかにもこれはたゞ木のめのやうなるものなりこれをつみてのちいかなるしかたをしてかくはなるべきとおもふにいとかなしくなりてこれをつみてのちのしかたをかきつけてこゝろをなぐさむるものなり

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用

山城國菟道
御物茶製所
上林家藏刻

鶯園先生著述書目		
萬葉集私記		初帙五冊
風土記逸文攷證		全六冊
語例	發語例 音通例 延語例 助語例 畧語例 體用例 約語例 轉約 雜例	全二冊
古事記歌注	内山真龍大人考注 前田夏蔭大人校補	全二冊
本朝儒官沿革考		全一冊
源氏物語考文		
古集刊誤		

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46
ガラス使用

841
46

鸚鵡叢考

題詠選

初帙三冊

全六冊

文政十二年歳次己丑十月發行

江戸下谷池之端仲町

製本所　尚友堂岡村庄助

木芽説

全一冊

よせふみ

いま（より学をとゝのへ事國の学法をやしなひ（学ぶ人の多くし教を誤多くるを）
勇儀の学者も猶能の歌仙もこゝろみ（学ぶ人の多くし教を誤多くるを）おと
申説の学ぶ詞もこゝろれて倭文考のさ絶を救ふ注をなを
遂ふ皇國の学ぶ晴取ふる一大を失つゝと（然るに五百年ばかり
さ絶ふ皇古学ふゝい印けて（事ふる事
にくゝろそ学の変革をくら（考ふれく今の学人皇國の書を儀む者古学
を本こを以ふ学の大勝をはふる学派学者もうふ（すれを無学人（まふるも
説無論をれる

お海たち志を理

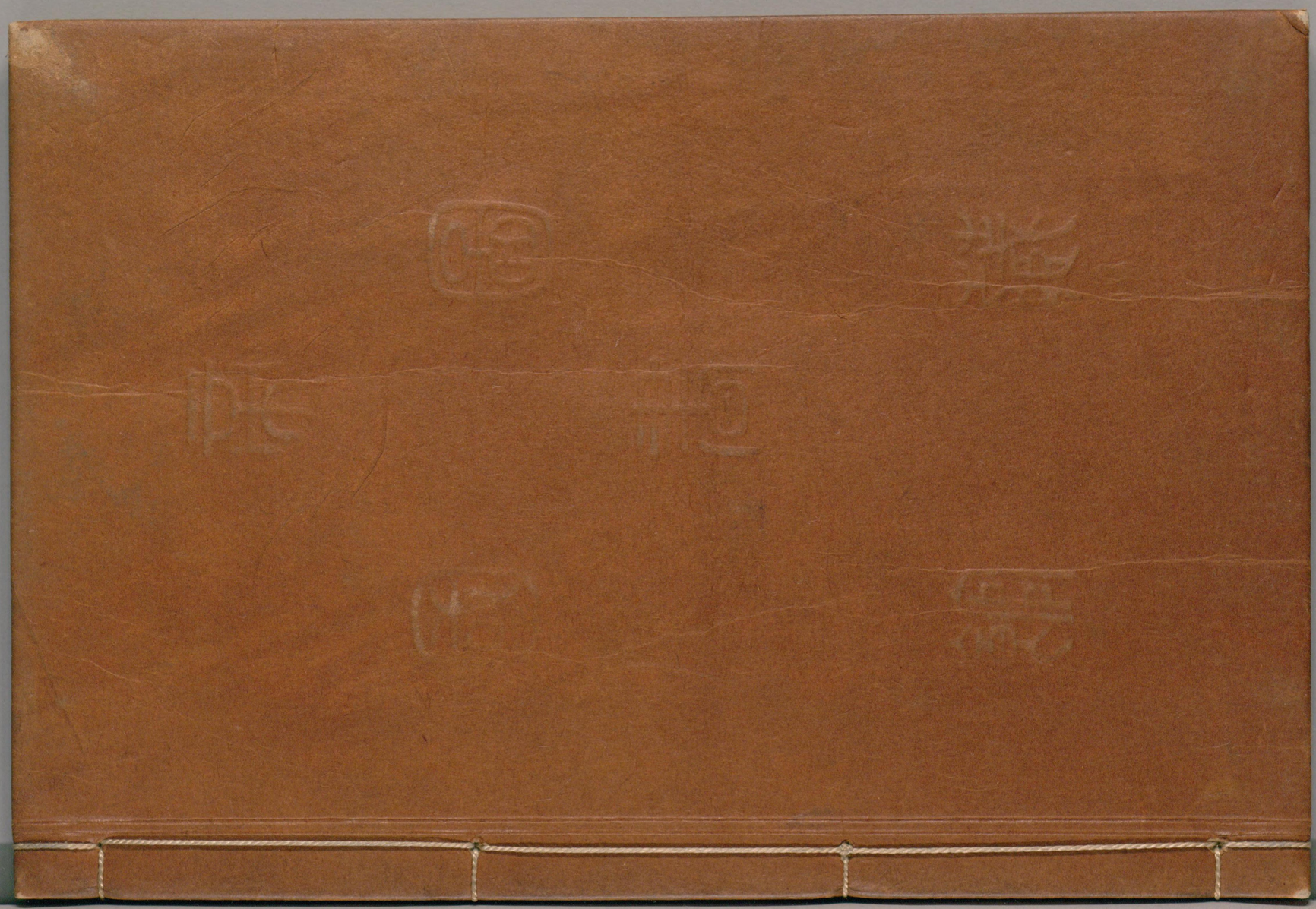
全二冊

古今集序をそ（め公任卿の新撰髄脳九品のふ（道濟十体基俊見秒な（
ふる（下詰家の髄脳教十卿の弟（ふ（をむねく拝ひ（ふて
歌合の判詞をも多く手ふを引用（ふ國歌に論の説家
評春海翁の歌ふ（歌論往復等の歌を本ふて古学の言（ふひある歌ふ
中比のすぐれる哥人の歌の古今ふ通（て注（用ふ（まふを今をそ拝ひ
集（れた皇に歌学ふ人（こゝ皇をかゝて歌古の準則とふ子ふ（

841
46

国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46

ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『木芽説』　請求記号 841-46